

オランダの国名（中城さまのメールの一部のコピーです）

主要国の国名変遷は、後者巻末の「年表」に出ています。それによると、ネーデルランド連邦共和国（1581～1795）、バタヴィア共和国（1795～1806）、オランダ王国（1806～1810、ナポレオンの弟が国王、1810 仏に併合）、オランダ立憲王国（1815～）となっています。むろん、オランダは日本の名称で、正式名称はネーデルランド王国・立憲王国です。また、外務省指導の『世界の国情報』（リブロ、年度版）が頼りです

Chronological outline

c. 10,000 B.C.	Prehistory The last ice ages	18th century	The Republic politically a second-rate power
c. 1900–750 B.C.	The bronze age	1747	Oranges hereditary stadhouders
c. 750 B.C.	The iron age		Patriots and Orangists
57 B.C.–A.D. 406	Roman rule	1795–1806	The Batavian Republic and its aftermath
until c. 650	Germanic society, Saxons, Frisians, Franks	1806–1810	King Louis Napoleon
	Conversion to Christianity	1810–1813	The French Period
c. 650–850	The Carolingian Empire	1814–1830/39	The Kingdom of the United Netherlands
800–814	Charlemagne	1814–1840	King William I
c. 850–1000	The Norsemen	1839	Establishment of the Belgian State
c. 1000	The development of territorial principalities	1839	The Kingdom of the Netherlands
	Regional sovereignty	1840–1849	King William II
c. 1200	The towns set the tone in politics, economy and culture	1849–1890	King William III
1350–1581	Burgundian–Habsburg rule	1890–1948	Queen Wilhelmina
	Centralization of power and authority	1948–1980	Queen Juliana
	The Reformation	1980–	Queen Beatrix
1515–1555	Charles V	1840 and 1848	Constitutional revisions
1555–1581	Philip II	1840–1890	Towards an industrial society: phase I
1586–1648	The 'Eighty Years' War':	1890–1940	Towards an industrial society: phase II
	Rebellion against foreign rule	1914–1945	Policy of neutrality, Pacifism
1576	The Pacification of Gent	1914–1918	World War I
1579	The Union of Atrecht and the Union of Utrecht		Economic crisis
			Fascism
1581	The Act of Abjuration	1940–1945	World War II
1581	Actual establishment of 'The Republic of the Seven United Provinces'	1945–c. 1960	Reconstruction
			International Co-operation
1648	The Peace of Munster: formal recognition of the Dutch Republic	c. 1960–c. 1980	Economic boom; the 'welfare state'
		c. 1980–	Further European integration
17th century	The 'Dutch Golden Age'.		Quest for an equilibrium in a social and multicultural society
	Voyages of discovery		
1602 and 1621	Establishment of United East India Company and West India Company		

<宛先> KPC オランダ、モルッカ諸島香辛料、日本人傭兵などで意見交換して頂いた皆様へ
中城さま、西内さま、公文さま、富田さま、藤宗さま

件名 参考資料の追加ご案内です

2021年11月26日

竹本 修文

11月24日付で投稿した、「1623年のアンボイナ虐殺事件」の原文の、Law and Torture in the Dutch Empireの日本語訳、オランダ帝国の法律と拷問に当初から疑問を持ちながら、ゴタゴタしました。結局は帝国を削除したのですが、これは日本人には分かりやすい解決方法だったが、英語圏特に著者には失礼な事になりました。

歴史に関しては、自国史ならともかく、近隣の諸国を含めた歴史では認識を共有する事は大変難しい事ですが、ヨーロッパの歴史を観察してきた私は、ECからEUになった早い段階でヨーロッパの歴史「欧州共通教科書」が出版されたときに、第1版のフランス語では無く、英語版と日本語版が出版されたときに両方を買いました。

そこには、我々が問題にしている時代のオランダの事を、「17世紀半ばのオランダ植民地帝国」という表題と共に、オランダと南北アメリカ、アフリカ、アジアを含めた植民地の地図が堂々と示されています。私が引用した文献のオーストラリアのモナシ Monash 大学教授、Dr. Adam Clulow が中心にまとめた法科学学生用のアンボイナ 共謀裁判と言う教材ですが、モナシ大学は世界の大学ランキングで100位以内で、日本は東大と京大と2校だけですがオーストラリアと中国は6校です。

1. ヨーロッパ共通歴史教科書

EUが出来て早い段階に不完全とは言え、共通教科書を作った事を見習いたかった事でした。



Histoire de l'Europe
ヨーロッパの歴史

総合編集 フレデリック・ドルーシュ
Une initiative européenne de Égédios BELOUCHE

木村尚三郎 監修 / 花上克己 訳
Suppléant KIMURA Naomasa / Traducteur HANABE Katsuyuki

執筆

ジャック・アルドベール

Jacques ALBERT
フランス、パリ、ルイ大帝高等学校校長、フランス共和国教育総長、大学教授、著者

ヨハン・ベンダー

Johan BENDER
デンマーク、オーフス、高等学校歴史学教授

イジー・グルーサ

Jiri GRUSA
チェコ共和国、プラハ、歴史学

スキピオーネ・グアラキーノ

Scipione GIARACINO
イタリア、高等学校教授

イグナス・マッソン

Ignace MASSON
ベルギー、ブリュッセル、高等学校教授

ケネス・ミルン

Dr. Kenneth MILNE
アイルランド、ダブリン、アイルランド教育行政委員会、歴史学博士

フーラ・ピスピリゴウ

Fuad PISPILIGOU
ギリシア、アテス、高等学校教授、歴史学博士

フアン・アントニオ・サンチェス・イ・ガルシア・サウコ

Dr. Juan Antonio SANCHEZ Y GARCIA SAUCHO
スペイン、大学教授

アントニオ・シモエス・ロドリゲス

Antonio SIMOES RODRIGUES
ポルトガル、コヴァリア大学歴史学教授

ベン・W.M. スミュルダース

Ben W.M. SMULDERS
オランダ、フリスラフ大学教育学教授

データー・ティーマン

Dietmar THIEMANN
ドイツ、ドルトムント大学教授

ロバート・アンウィン

Dr. Robert UNWIN
イギリス、ヨーク大学教育学部委員長

2.

オランダ帝国では無くオランダ植民地帝国ですが、EUの歴史の専門家が認めた教科書ですので、

3.



北ヨーロッパ経済の役割

16世紀後半と17世紀には、人的にも経済的にもより大きな資源を持つ北ヨーロッパが海外進出に活発な動きをみせた。イギリス、フランス、オランダは、ポルトガルとスペインの制度的弱点と政治情勢に乗じて、独自の植民帝国をつくりあげた。重商主義的な観点から、これらの植民地は一つの市場と見なされた。この市場は、本国の経済成長に必要な原料、および本国で消費したり第三国へ輸出する商品を提供する生産地でもあった。大規模な株式会社が、国家と何らかのつながりのある商人たちの共同出資で組織されて、海外貿易を独占し、それぞれの植民帝国の形成に決定的な役割を演じた。イギリスとオランダの東インド会社はその典型である。フランスでも会社組織が大きな役割を演じたが、補助金など様々な便宜供与の点で王室がより深く関与していた。

この時代には、キリスト教の布教は別の意味を帯びるようになっていた。布教の動機はもはや純粋な伝道精神のみではなかった。にもかかわらず、大規模な布教の根拠地

が次々と誕生していった。例えばニューフランス(フランス領カナダ)では、アベナキス・インディアンがキリスト教を受け入れたばかりでなく、同じ神を信ずる兄弟としてフランスの強力な同盟者となった。

ヨーロッパの植民地建設には共通の特徴があった。特に貿易や商館のネットワーク、戦略的地域の支配、移民植民地や奴隷労働に依存したプランテーションの建設などである。植民地は王国の一部と見なされ、司法制度は宗主国のものをモデルとしていたが、実際の適用に当たってはある程度の自治権が認められた。

4.

5.